



## ●エピローグ● オーストラリアはサラダボール国家

シビルNPO 連携プラットフォーム 理事 世古 一穂

オーストラリア人の5人に一人は海外生まれ。世界130か国からの移住者だ。白豪主義から多文化主義へと180度の転換を果たしたオーストラリアは、これまでにない多民族共生の国作りを、進めてきた。さまざまな民族がどうやって共に暮らすか、政治は？経済は？福祉は？教育は？移民を、ほとんど受け入れない日本とはまるで違うオーストラリアに大きな関心を持って旅に臨んだ。

「コスモポリタン都市」とはたんに、民族、エスニシティの多様性だけを、さすのではない。それだけなら米国もそうだろうが、オーストラリア人が誇りにしているのは、かれらが多民族国家づくりにおいて民族の共生を、めざした国づくりを大きな社会的混乱なしに着実に成果をあげていることである。

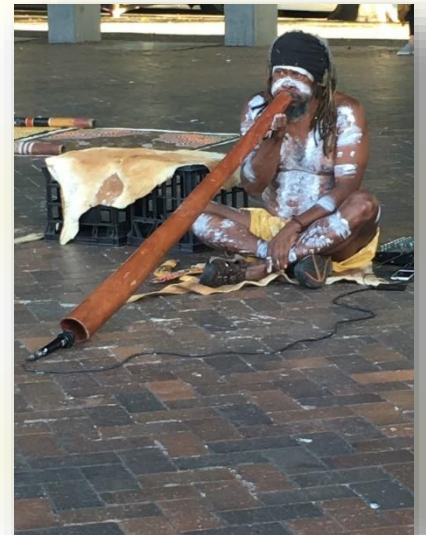
### ●異質の他者の排除から共生へ、

180度の、政策転換の成功の秘訣として挙げられるのが、「多文化主義」だという。この新政策のもとでは、すべてのオーストラリア人がそれぞれの言語、文化、宗教などを維持しながら、人種、民族、性の違いに関わりなく平等な市民として国の発展に貢献する権利を保障されているのだ。

同化主義に基づく米国とは大きな違いである。

とはいえ、白豪主義から多文化主義への政策転換か、そのまま国民の意識改革につながるわけではない。

新しいオーストラリア国家像を織り上げていこうとする試みはまだ実験段階といってもよいのかもしれない。



アボリジニの男性の街頭での演奏

### ●それに対して日本はどうか？

日本の指導者たちの発言の裏にあるのは、日本民族と文化の優越性神話ではないだろうか？日本人のいう「国際化」とは日本を世界のようにするのではなく、経済とテクノロジーを武器にした世界の日本化ではないだろうか？

移民問題、難民問題にしても、その受け入れ枠はすこしずつ拡大されたものの、消極的な基本姿勢はいまだに変わっていない。

私たち日本人がオーストラリアから学ぶべきことは多々あるが、私は多文化主義の本質をこの国から深く学ぶことが、少子高齢化が課題となっている日本にとってもっとも大切なことだと思った。

私たちが訪れたジャカラダの満開の季節はオーストラリアが一番美しい季節だと聞いた。

ジャカラダは多文化共生の象徴とも言えるのでないだろうか？



満開のジャカラダ

